『虞美人草』とメレディスの『エゴイスト』
―「作者」の顕在化について―

レオン・ユット・モイ

はじめに

『吾輩は猫である』『坊っちゃん』で有名になった夏目漱石は、朝日新聞社に入社して本格的な専業作家の道を歩み始める。しかし、苦心の作である入社第一作『虞美人草』は、勧善懲悪にパターン化された小説構造、類型化された人物造型、「作者」の介入などという点から、しばしば「失敗作」と見なされた。また、比較文学の分野では、『虞美人草』はよくメレディスの『エゴイスト』から様々な影響を受けたといわれてきた。例えば、文体においては両作とも美文であり、警句が頻繁に散りばめられること、物語においてはエゴ、結婚問題、人物の重なりなどの類似点が見られ、その影響関係は決して否定できない。[1] 実際、以上のような類似点のほか、両作は「作者」の顕在化という要素をも持っている。漱石文学研究において、『虞美人草』の「作者」が作中に現出することに関する先行研究は少なくない。『虞美人草』は従来『エゴイスト』に影響されたといわれてきたが、「作者」の顕在化という影響の有無についての分析は、管見では、まだなされていないようである。本論は、両作のテクストに着眼してそれぞれの例文を取り上げて分析していく。両作の「作者」の顕在化を比較することによって、『虞美人草』と『エゴイスト』の関係考察の一助とするとともに、『虞美人草』の語りの特徴を明らかにしたい。

一、先行論における『虞美人草』の「作者」の顕在化という問題

従来、『虞美人草』の「作者」の顕在化を、作家漱石とかかわらせて述べる先行論[2]が多かったが、近年、『虞美人草』に現出する「作者」は「語り手」としてとらえられている。松元季久代氏は、『三四郎』の語り手と作者について考察し、『虞美人草』についても言及している。

> 『野分』や『虞美人草』では、周知のように時に「作者は」と自称しながら、大上段に立って作品世界を支配しようとする語り手の顔が前面に押し出されていた。部分的に内言に近いものも認められ、亀裂の可能性はあるのだが、総体としては人物の傀儡性、展開の図式性は避けられなかったのである。[3]

また、武田信明氏は、『虞美人草』の語りについて次のように指摘

している。

小説が自身の言説の中で自ら小説であることに言及する場合、それは通常「メタフィクション」と呼ばれる。その意味で『虞美人草』はメタフィクションと呼ばれるべき資格を充分有している。（中略）話者はしばしば小説観を開陳しながら、『虞美人草』の小説としての正当性を主張する。（中略）メタフィクションが小説という形式を意図的に破壊することで新たに多層的な小説を構築しようとする試みであるとするなら、漱石には「破壊」という意図はまったくないからである。だが複数の作中人物による複雑な関係によって展開してゆく物語は予断を許さない。あるいは作品はその「長さ」において常に破綻の可能性をはらんでいる。そのため漱石は話者に強大な権限を与えたのである。つまり話者は作中世界に前面に介入することで作品を必死で統御しようとしているのであるが、その振る舞いがある種のメタフィクションと結果的に似てしまうのである。話者は、『虞美人草』が小説であるという自明のことがらをくどいまでに誇張し、自らこそが、その虚構世界の統括者であることを明示する。(4)

松元氏は、「作者」を「作者と自称する語り手」と名付け、武田氏は「作者」を「話者」として認識し、『虞美人草』のメタフィクションの性質を強調しながら、「話者に強大な権限を与えた」ことを小説の「長さ」・「破綻」と関係づける。こうした先行論を踏まえつつ、本稿では、「作者」に関連した事物を語彙レベルまで検討し、その機能を追究したい。両作のテクストの言葉遣い、つまり最も表面的なものから、「作者」の顕在化のあり方にまで留意し、それぞれのもつ特徴を明らかにすることが目的である。

二、漱石とメレディス・『虞美人草』と『エゴイスト』

ジョージ・メレディス（George MEREDITH, 1828-1909）はイギリス南部のポーツマスに生まれた小説家・詩人である。小説家として、円熟期の代表作『エゴイスト』（1879）は彼の最大の傑作と見られている。『エゴイスト』の日本語訳者・朱牟田夏雄氏によれば、「一八九二年に詩人テニソンが没後、その後を襲ってイギリス文芸家協会の会長にもえらばれ、文壇とは不即不離のような特殊な立場にあった彼も、いつとはなしに押しも押されもしない大家の地位にのし上がった形となった」。(5) メレディスと同じく十九世紀に生まれ、英文学を専攻した漱石は渡英したほぼ五ヶ月後の一九〇一年（明治三四）二月二十日の日記で、「Craig ニ George Meredith ノ事に就て聞たら少しも知らない色々言訳をした英語の書物を悉く読まねばならぬ訳はない耻るに及ばぬ事だ」と記し、早速当時名声が高いメレディスに注目していることがわかる。

日本でメレディスについて言及するときに、漱石の名がよくあげられる。和気律次郎と繁野天來はそれぞれ次のように指摘する。

其作物は多くは英米の読者にすら、頗る難解の物であると聞く。されば邦人の手になれる評論等も、只漱石先生のそれをおいて、他に見るに足るものが無かつたのも、蓋し当然の事であらう。(6)

メリディス研究の盛んになりつゝある今日、我国にも篤志の学者が続々出て、国文学史上に於ける故夏目漱石氏の位置を決定する前に、先づ氏にその行方を示した本書の作者の真価を見きはめて貰ひたいものである。(7)

メレディスは一九〇九年五月十八日に逝き、その三日後漱石と野上臼川との対談「メレディスの訃」(8)が『国民新聞』に載っている。漱石はメレディスの作品を「大抵皆読んだ。而して大変エライと思つてる。」と言い、メレディスの作風について次のように述べている。

一面では理窟を述べると同時に、一面では極て詩的な事を書く人である。色々な場面があるが、悉く一種の詩趣を帯びてゐる。しかも決して糊細工の様な浪漫的(ローマンチック)の臭気を帯びてゐないから面白い。(中略)併し一方で此んなに尊敬を払つて居る人も、其の実どの位の程度までメレディスを読んでゐるかは疑問である。

また、飛ヶ谷美穂子氏の調査(9)によると、漱石山房蔵書にあるメレディスの作品十八巻の内十六巻に書き込みが見られ、メレディスの作品を深く読み込んでいる様が窺われる。

三、「作者」の顕在化――『虞美人草』の場合

本稿では、小説中に登場する「作者」を、「作者」の「仮面を被る語り手」のようにとらえる。『虞美人草』では、三人称視点の語り手は「作者」と自称しながら、自らが書き手であることや、書く行為をなすという意識を明らかに持っている。「作者」は、自分が書き手としての「作者」で、読み手が「読者」であり、自分が「筆」を使って「小説」を書き、「小説」の中で物語を「叙述」すると書いている。言い換えると、物語世界外に属する事物である「作者」「読者」「筆」「叙述」「小説」の語を通して、「作者」は自らや「読者」の存在を意識しているのだ。また、この「作者」は、登場人物に対しての最眉が非常に顕著であり、自らの主観を流露している。『虞美人草』における「作者」の露出のあり方で、最も特徴的なのは、いうまでもなく、第八章と第九章で、「作者」という言葉をむき出しのままテクストに持ち込んでいることである。次はその引用である。

此作者は趣なき会話を嫌ふ。猜疑不和の暗き世界に、一点の精彩を着せざる毒舌は、美しき筆に、心地よき春を紙に流す詩人の風流ではない。閑花素琴の春を司どる人の歌めく天が下に住まずして、半滴の気韻だに帯びざる野卑の言語を臚列するとき、毫端に泥を含んで双手に筆を運らし難き心地がする。宇治の茶と、薩摩の急須と、佐倉の切り炭を描くは瞬時の閑を偸んで、一弾指頭に脱離の安慰を読者に与ふるの方便である。たゞし地球は昔しより廻転する。明暗は昼夜を捨てぬ。嬉しからぬ親子の半面を最も簡短に叙するは此作者の切なき義務である。茶を品し、炭を写したる筆は再び二人の対話に戻らねばならぬ。二人の対話は少なくとも前段より趣がなくてはならぬ。(八・一三六頁)

作者は小夜子を気の毒に思ふ如くに、小野さんをも気の毒に思ふ。(九・一五一頁)

a「作者」と「読者」

「この作者は趣なき会話を嫌ふ」「嬉しからぬ親子の半面を最も簡短に叙するはこの作者の切なき義務である。」「作者は小夜子を気の毒に思ふごとくに、小野さんをも気の毒に思う。」とあるように、「作者」という言葉は三カ所で見られる。さらに、「作者」の語と同じ段落には、テクストを読む相手である「読者」の語も見られる。

では、作中に現れた「作者」は、何を語っているのであろうか。（八）では、「趣なき会話を嫌ふ」「閑花素琴の春を司どる人の歌めく天が下に住まずして、半滴の気韻だに帯びざる野卑の言語を臚列するとき、毫端に泥を含んで双手に筆を運らしがたき心地がする。」というように、「作者」は「趣なき会話」を嫌うと自身の好みを提示し、「双手に筆を運らしがたき心地がする」と自らの心情を示す。（九）では、「作者」の「小夜子」「小野」に対しての心情（「気の毒に思う」）も見られる。

さらに、（八）では、「嬉しからぬ親子の半面を最も簡短に叙するはこの作者の切なき義務である。」というように、作者は自らの心情を抑え、自分を苦しめる「義務」をなすべきだとレトリックを弄している。その上で、嫌でもいいよ「茶を品し、炭を写したる筆は再び二人の対話に戻らねばならぬ。二人の対話は少なくとも前段より趣がなくてはならぬ。」というように、「作者」の義務を遂げ、より一層趣のある対話を取り込もうとするのである。

b「筆」と「叙述」

また、（八）では、「双手に筆を運らしがたき心地がする」「茶を品し、炭を写したる筆は再び二人の対話に戻らねばならぬ。」というように、「作者」「読者」のような、物語世界外にあるはずの者のほか、「作者」の書く行為に使われる道具、「筆」もテクスト内に現れる。

> 謎の女の云ふ事は次第に湿気を帯びて来る。世に疲れたる筆は此湿気を嫌ふ。辛うじて謎の女の謎をこゝ迄叙し来つた時、筆は、一歩も前へ進む事が厭だと云ふ。日を作り夜を作り、海と陸と凡てを作りたる神は、七日目に至つて休めと言つた。謎の女を書きこなしたる筆は、日のあたる別世界に入つて此湿気を払はねばならぬ。（十・一八〇頁）

> 叙述の筆は甲野の書斎を去つて、宗近の家庭に入る。同日である。又同刻である。（十六・三四〇頁）

もちろん、「筆」は書くための道具にすぎないが、擬人化された「筆」は、「作者」そのものだと見なしても差し支えないだろう。前掲の武田信明氏は、このような擬人化を「身体的行為」と指摘している。

> 話者という声としての存在が、なにがしかの人格を備えているということを想定させてしまうだろう。（中略）話者は書き手として執筆の困難さを嘆いてみせる。それによって「書く」という身体的行為を現前化させるのである。この話者は人格のみならず身体をも備えている、あるいは

それらが仮構されているのだ、と言えるだろう。[10]

さらに、「叙述」の語も二カ所で現れ、「作者」の執筆行為を顕示する。

手紙は点滴の響の裡に認められた。使が幌の色を、打つ雨に揺かして、一散に去つた時、叙述は移る。最前宗近家の門を出た第二の車は既に孤堂先生の僑居に在つて、応分の使命をつくしつゝある。

（十八・四二六頁）

雨を衝く一輛の車は輪を鳴らして、格子の前で留つた。がらりと明く途端に、ぐちやりと濡れた草鞋を沓脱へ踏み込んだものがある。――叙述は第三の車の使命に移る。

（十八・四二九頁）

「叙述」は、「作者」の書く行為と絡んでいる。これもまた、「作者」「読者」「筆」と同様、物語世界内に明白に出されるはずの「言葉」ではない。なぜなら、「叙述」は能動的なものでなく、「叙述は移る」というように、背後に「叙述」を操作する者がいるからである。前者の例では、「叙述」は移る前に、宗近は小野を訪ねに来る。「叙述」が移ると、熱が出た孤堂先生の家に宗近老人がやって来る。シーンが変わることを「作者」は示唆する。そして、後者の例は、（第一の車は宗近を乗せて小野の家へ、第二の車は宗近老人を乗せて孤堂先生の家へ、第三の車は糸子を乗せて甲野の家へ）「叙述は第三の車の使命に移る。」とあり、「作者」はこれからのシーンは甲野の家であると示しているのである。

c「小説」

書く行為の産物である「小説」という言葉も、「作者」は憚らずにテクストの中に持ち込んでいる。さらに、（三）の登場人物の「性格を描き出す」という「作者」がなすべき行為も、「作者」はテクスト内において明言している。

兄弟と雖も他人である。斬つた張つたの境に甲野さんを置いて、始めて甲野さんの性格を描き出すのは野暮な小説である。廿世紀に斬つた張つたが無暗に出て来るものではない。

（三・六〇頁）

自分の世界が二つに割れて、割れた世界が各自に働き出すと苦しい矛盾が起る。多くの小説は此矛盾を得意に描く。小夜子の世界は新橋の停車場（ステーション）へ打突つた時、劈痕が入つた。あとは割れる許りである。小説は是から始まる。是から小説を始める人の生活程気の毒なものはない。

（九・一五一頁）

つづいて車が二挺出る。一挺は小野の下宿へ向ふ。一挺は孤堂先生の家に去る。五十分程後れて、玄関の松の根際に梶棒を上げた一挺は、黒い幌を卸した儘、甲野の屋敷を指して馳ける。小説は此三挺の使命を順次に述べなければならぬ。

（十八・四一〇頁）

（九）の「多くの小説はこの矛盾を得意に描く。」という文章にある「小説」は、『虞美人草』を指していないとしても、「小説はこれから始まる。これから小説を始める人の生活ほど気の毒なものはない。」の「小説」は、紛れもなく『虞美人草』を指すのだろう。また、「これから小説を始める人」というのは、「作者」の作り出した登場人物「小夜子」と、次の文章で出てくる「小野」を指す。「作者は小夜子を気の毒に思う如くに、小野さんをも気の毒に思ふ。」という文章は、「作者」の現出がたいへん顕著に見られる。（十八）の「小説はこの三挺の使命を順次に述べなければならぬ。」も同じように、「作者」は、自分のなすべきこと（「使命」「義務」）を物語世界内へ持ち込んでいる。

「作者」の語によって、「作者」の露出が顕著に表されるほかに、読む行為をなす人物（「読者」）も物語世界内へ巻き込まれる。同時に、「作者」の好悪・心情・義務・書く行為に関する描写、「作者」のなす書く行為に用いる道具（「筆」）、「作者」に属する書く行為（「叙述」）、書く行為の産物（「小説」）など、物語世界外に属する事物も見られる。物語世界外に立つはずの「作者」に属するモノが物語世界内へ持ち込まれることによって、『虞美人草』には異なるレベルの世界が交錯するのである。

四、「作者」の顕在化――『エゴイスト』の場合

では、よく『虞美人草』が比較される『エゴイスト』の場合はどうであろうか。まず『エゴイスト』の内容を簡単に紹介しておこう。美男で金持ちの典型的な紳士サー・ウィロビーは、幼なじみの貧しく美しいリシチアに愛されるが、自分と釣り合う富裕なダラム嬢と婚約する。しかし、ダラム嬢は彼の本性を見通して、別の男性と結婚してしまう。その後、彼は才色兼備の佳人クレアラと婚約するが、のちクレアラも彼の自己中心的な性格に落胆し、婚約を取り消そうとする。最後に、自らのエゴで二人の婚約者を失うウィロビーは何度も傷つけてきたリシチアに求婚する。リシチアはその求婚を拒絶したが、結局彼と結婚することになる。

さて、『エゴイスト』においても『虞美人草』と同じように「作者」が現出するが、そのあり方は異なっている。例をみてみよう。

a "I"（「著者」）

① 求愛期はエゴイズムの謝肉祭であり、われらの本性に試金石をつきつける。著者のいうのは愛である。謝肉祭だからとてその仮面ではない。

（第十一章　上・一九一頁）

(The love-season is the carnival of egoism, and it brings the touchstone to our nature. I speak of love, not the mask...) p.110

『虞美人草』と異なって、『エゴイスト』の英原文には「作者」(author/writer) という言葉が使われておらず、"I"という代名詞で「作者」を顕示する（日本語版では"I"を「著者」と訳されている）。『エゴイスト』の地の文において"I"はしばしば現れており、『虞美人草』より「作者」の露出度がかなり高いといえる。

b「作者」による補足

② いつもながらの幸運で、偶然にも（人知らぬ至高の配剤所から我らに配給されるものを我らは偶然とよぶのだが）菩提樹の並木のほうに目をやると、それはちょうどテラスのはずれまで来てまわれ右をしようとした一瞬だったが、そしてもう一つ附け加えておくと、愛する者の特権といった口調でダラム嬢に愛の熱情について語っていた時だったが、（後略）

（第一章　上・二一頁）

(Chancing with his usual happy fortune (we call these things dealt to us out of the great hidden dispensary, chance) to glance up the avenue of limes, as he was in the act of turning on his heel at the end of the terrace, and it should be added, discoursing with passion's privilege of the passion of love to Miss Durham（後略）) p.8

『エゴイスト』では、括弧を用いて「作者」による補足情報が見られるが（次の例③も同様である）、『虞美人草』では括弧を用いて説明を加えることが見られない。

c「作者」は「読者」と「主人公」を共有する "our hero"（「われらの主人公」）（＋括弧で補足）

③ 世間を軽蔑することでおのれの自尊心を守り、ついでにもう一つ（これはほめてよかろうが）、愛人の繊細な心を守ろうとするこの方針に、われらの主人公は強い主張を持っているのだ。

（第六章　上・八二頁）

(Our hero had a strong sentiment as to the policy of scorning the world for the sake of defending his personal pride and (to his honour, be it said) his lady's delicacy.) p.45

『エゴイスト』の英原文では、『虞美人草』のように「読者」(reader) という言葉が見られないが、例⑥のように"your"で「読者」を示す。また、「われらの主人公」を以て、「作者」は「読者」と「主人公」を共有する。さらに、この例においても、例②と同様、括弧を用いて作者の感想・補足が見られる。

d「読者」を巻き込む

・「作者」の命令（再読行為を促す）

④ もしまた、敏感で恋をしている男がそうまでも盲になれるものかとたずねる男がいたら、その人には罰としてこの前の一節をもう一度よく読みなおしてもらおう。

（第十一章　上・一九四頁）

(And if you ask whether a man, sensitive and a lover, can be so blinded, you are condemned to reperuse the foregoing paragraph.) p.111

「作者」は例③で「読者」と主人公を共有するが、ここで「作者」は一歩進んで顔を出し、「読者」にあらわに命令を出して再読行為を促している。『虞美人草』では、このような「作者」が「読者」に再

読行為を指示することが見られない。

・「作者」の命令（「読者」に指示する）

⑤ 好意をもってこの男を考えてやろう。エゴイストは「自我」の「子」である。同時にその「父」でもある。子は父を愛し、父は子を愛する。二人は最も緊密な絆を通じて愛情を交換する。（第三十九章　下・二一四頁）

(Consider him indulgently: the Egoist is the Son of Himself...) p.398

『虞美人草』の「作者」は、「此作者は趣なき会話を嫌ふ。」「作者は小夜子を気の毒に思ふ如くに、小野さんをも気の毒に思ふ。」と自らの好悪や思いを示唆するが、『エゴイスト』の「作者」も自らの思い（好意をもってこの男を考えてやろう）を「読者」に伝え、どのように登場人物を考えるべきかと「読者」に指示している。

・「読者」に任す

⑥ 「かりに私が結婚して、それからもし逃げたとしたら！」これが先刻からの思案だ。もう生殺も与奪も読者の御意のままである。ただし、今われわれが相手にしているのは、絶体絶命の状況におかれたと感じている一人の娘である。しかも愚者ではない。（第十一章　上・一九五頁）

("Were I to marry, and to run!" There is the thought: she is offered up to your mercy. We are dealing with a girl feeling herself desperately situated, and not a fool.) p.112

例③で述べたように、『エゴイスト』では"reader"（「読者」）という言葉がないが、読み手の「読者」を指す"your"が見られる（日本語訳では、"your"が「読者」に訳される）。例⑤と異なって、「作者」はここで「読者」に指示を出せず、「生殺も与奪も読者の御意のままである」ように、登場人物に対して「読者」に生殺与奪の権利を与える。『虞美人草』では、「読者」という言葉はあるが、『エゴイスト』のように登場人物に対して「読者」に判断を任す例は見られない。

・「読者」に質問する、提示を与える

⑦ ほんとうになぜなのか？　われわれがこの問いに答えるときは、何らかのすぐれた性質、世間から気づかれず、自分自身でもしかとは確認していない程度の、傷つけられたわれわれの美質を、憤然とたのみにして、答えるのが常である。（第二十一章　上・三五三頁）

(Why? We answer that question usually in angry reliance on certain superb qualities, injured fine qualities of ours undiscovered by the world（後略）) p.202

『エゴイスト』では、「作者」は「読者」とよく交流する。「作者」は声をかけ、質問を投げ、「読者」に考えさせながら自らの答えを提供する。

・"we" "us" "you" "our"（「われわれ」「諸君」）

⑧

この国の紳士がたは、こういう落ちついた離れわざの話にはいつも心から悦に入る。ちっぽけな島国だが、やることはどうだ、というわけだ。（中略）イギリスでは公爵の血が実業界に入ったり、系図学者の説によれば、ただの商売人に王家の血が流れていたりもする。ずいぶん誇り高いくせに、まことに奇妙な国柄で、われわれはプランタジネット家の流れをくむ男の作った籐椅子にふんぞり返って、チューダー家の子孫の肉屋に肉を注文しているかもしれないのだ。そのうちにひょっとしたら…いや、尊厳は尊重しよう。（第一章　上・二一頁）

(The humour of gentlemen at home is always highly excited by such cool feats. We are a small island, but you see what we do. （中略）We English have ducal blood in business: we have, genealogists tell us, royal blood in common trades. For all our pride we are a queer people; and you may be ordering butcher's meat of a Tudor, sitting on the cane-bottom chairs of a Plantagenet. By and by you may . . . but cherish your reverence.) p.7

⑨

サー・ウィロビーはクレアラとの約束を考えた。しばらくクロスジェイ少年をおもちゃにしてから追っぱらうと、ひとり瞑想に耽った。国のために職務遂行中にたおれた政治家の像で、この形で立っているのがずいぶんあることに、諸君もお気づきであろう。（第十四章　上・二三二頁）

(So shall you see standing many a statue of statesman who have died in harness for their country.) p.132

『虞美人草』では、読み手を指す「読者」という言葉が見られるのに対して、『エゴイスト』は"reader"（「読者」）という言葉が現れていない。例⑥で述べられた「読者」を指す"you"という言葉は時々「諸君」と訳されているが、これも「読者」を指すことにほかならない。例⑧⑨では、「読者」を巻き込むことが多く見られる。

例⑧では、「読者」がイギリス人である場合、「作者」は「読者」と同じ時空間を共有し、イギリス人としての共感を得ることができるだろう。「読者」がイギリス人でなければ、「作者」は「読者」にイギリスの情報を与えることになる。一方、例⑨では、「作者」は「読者」の注意を促している。

五、両作における「作者」の顕在化のパターン

両作とも三人称で語られているが、テクスト内では、『虞美人草』は「作者」という直接の言葉を以て「作者」が作中に現出する。他方、『エゴイスト』では、（会話を除いて）三人称の語りを持ちながら、"I"という言葉で「作者」を顕示する。

『虞美人草』では、「作者」「読者」という言葉がそのまま文章に現れる。『エゴイスト』の場合は、日本語訳版では"I"を「著者」、"you"を「諸君」と訳されているが、比喩的意味を除けば、『エゴイスト』の「作者」を指す"author""writer"、「読者」を指す"reader"という言葉は見られない。それにしても、"you"という言葉が指すのは「読者」であることにほかならない。

「作者」が創出した登場人物である「主人公」という言葉は、『エゴイスト』において見られる。先述の"I"（「作者」）のような翻訳（言

葉）の問題が生じず、"hero"は「主人公」のままに訳される。「われらの主人公は強い主張を持っているのだ。」（Our hero had a strong sentiment）（上・六章・八二頁/p.45）が見られる。さらに、『エゴイスト』の場合では、「われらの」「われわれ」という言葉によって、「作者」と「読者」の間で「主人公」を共有するかのように思わせて、「作者」と「読者」の関係をより一層緊密にする。

「読者」をテクスト内へ巻き込むという点において、『虞美人草』では、「作者」は直接に「読者」に呼びかけはしない。他方、『エゴイスト』では、「作者」は直接に「読者」に声をかけ、指示して、再読行為を促し、質問を投げ、様々な形で「読者」をテクスト内へ巻き込んでいる。

言い換えると、『エゴイスト』の場合、テクストに現出する「作者」は、「読者」を巻き込むことが多い。「読者を巻き込む」というのは、ときに「作者」に質問され、注意を促され、生殺与奪の権を与えられることで、読者はただ受け身的に与えられたテクストを読むのでなく、「作者」の質問や促しに注意を払い、能動的に考えながら読み進めなければならない。

また、「読者」を巻き込む例には幾つかのパターンが見られる。

○「作者」は「読者」と同一レベル

(i)「作者」は「読者」とテクストの時空間（イギリス）、主人公を共有する＝同一レベル　↓例 ③⑧

○「作者」は上のレベルにいる

(ii)「作者」は「読者」に命令を与える ↓ 例 ④⑤

(iii)「作者」は「読者」に質問する、提示を与える ↓ 例 ⑦

(iv)「作者」は「読者」に注意を促す（you see）↓ 例 ⑨

○「読者」は上のレベルにいる

(v)「作者」は「読者」に決定を任す　↓ 例 ⑥

○「作者」の行動

(vi)「作者」は補足情報を提供する ↓ 例 ①

（「作者」は補足情報を提供する＋同一レベル）↓　例 ②（"I" call ではなく"we" call）

『虞美人草』が『エゴイスト』から種々の影響を受けたことは否定できないが、「作者」が顔を出す点において、『虞美人草』は独自の「顕在化の様相」を持っている。『虞美人草』の「作者」は憚らずに「作者」・「読者」という直接の言葉を用い、「作者」の側に属する事物、つまり、物語世界外の「作者」のなす書く行為の道具（「筆」）、書く行為（「叙述」）、書く行為の産物（「小説」）という言葉を使い、また、自らの好悪・心情・義務などによって、「作者」は現出し、自らの存在を強調するのである。

『エゴイスト』の「作者」が「読者」と様々な「交流」をすることと比べると、『虞美人草』のような一方通行で、多様性の欠ける「作者」の現出の仕方は、少し無味乾燥であろう。『エゴイスト』の「作者」は直接「読者」に声をかけ、指示し、再読行為を促し、質問を投

げる。このような多様な現れ方によって、「読者」をテクスト内へ誘い込んで、「作者」と一緒にテクストの時間・空間などを共有させる。また、例②③のように、括弧を用いて補足情報を「読者」に与えるだけでなく、同時に「作者」「読者」が同一レベルにいることも示されている。「作者」の顕在は実に多様で、ある時は「読者」を支配し、ある時は支配権を「読者」に与え、またある時は支配をやめ、「読者」とテクストを共有して、「読者」を飽きさせることがない。

他方、『虞美人草』の「作者」は、自らの好悪をはっきりと述べ、絶対的な支配者・独裁者のように「読者」の読みを支配するために、多様性が欠けることだけでなく、「読者」に違和感を感じさせてしまう。『エゴイスト』と異なって、『虞美人草』では相原和邦氏[11]の言う「作者が直接的な読者への呼びかけ」がない。しかし、「神の位置」、「全体を支配」、「全能視点」という至高の権を握る「作者」は、一方通行的に現出し、「読者」の領域に踏み込みながら自らの主観を「読者」に強いる。「このように『虞美人草』・藤尾を読むべきだ」とでも言っているかのように、「作者」自らの情報・主観を「読者」に提供する。『虞美人草』の「作者」は、「読者」の協力を求めることがなく、『エゴイスト』の「作者」のような「読者」と様々な交流をすることもない。

おわりに

『虞美人草』において、「作者」「読者」という直接の言葉だけでなく、物語世界外に属する事物（「筆」「叙述」「小説」）、あるいは「作者」の行為の描写などによって、「作者」は顕在化している。よく『虞美人草』と比較される『エゴイスト』にも、「作者」の顕在化がなされてはいるが、『エゴイスト』においては、「作者」の現出は『虞美人草』より多様で、支配的・独裁的な「作者」の影が薄い。一方通行の支配者のような顔の出し方が『虞美人草』の失敗の一つの要因でもあると思われる。このように、少なくとも、「作者」の現出の仕方という点において、『虞美人草』は『エゴイスト』から影響を受けていないといえよう。

むしろ『虞美人草』の「作者」を顕示する特徴や勧善懲悪の要素を持つ近世文学にかかわっていると考えられる。「八犬伝を通して見られる曲亭馬琴と同様である」[12]と正宗白鳥が指摘したように、『虞美人草』には勧善懲悪的要素が目立っている。周知の如く、「作者」が作中に現出することは、近世小説の特徴でもある。近世小説と同様に、『虞美人草』の「作者」は顔を出し、「作者」の立場を明言し、作中で徳義心を吹聴する。前掲の武田氏が指摘したように、『虞美人草』にポスト・モダンなメタフィクション性があることは見逃せないが、『虞美人草』の勧懲主義と「作者」の現出のあり方は、むしろ近世小説につながっているのではないだろうか。この点については、また別の機会に論及したい。

とはいえ、漱石の専門であるイギリス文学、あるいは彼の「大変エライと思ってる」メレディスの作品が漱石文学の養分となったことは決して否定できない。『エゴイスト』と『虞美人草』の間には不可分な関係があるし、とくに結婚問題をめぐってそれぞれの時代空間における前衛的な女性の造型は興味深い。また、エゴの問題、創作意図の

比較などについても、今後、考察を進めていきたい。

注（1）※久野真吉「『ヂ・エゴイスト』のクレアラか『十字路のダイアナ』のダイアナか――『虞美人草』におけるメレディスの引用につき――」『宮城学院女子大学研究論文集』19　一九六一年十二月

※和泉一「メレディスと漱石（一）――受容と変質――」（『近代』35　一九六四年二月　神戸大学近代発行会

※海老池俊治「漱石と英文学『虞美人草』と『三四郎』の場合」『言語文化』一橋大学語学研究室No.2　一九六五年十一月

※越川正三「『虞美人草』と『エゴイスト』――比較文学論の試み――」関西大学『文学論集』第三十九巻第一号　一九八九年一月

※飯島武久「『虞美人草』における近代文明批判――メレディスの『エゴイスト』と関連して」『山形大学紀要』（人文科学）第十四巻第三号　二〇〇〇年二月

（2）小宮豊隆『漱石の芸術』一九四二年十二月　岩波書店

（3）松元季久代「『三四郎』の語り手と作者――アイロニーからの脱出――」『日本近代文学』第四十五集　日本近代文学会　一九九一年十月

（4）武田信明「「小説（フィクション）」の構築　『虞美人草』論」『漱石研究』第十六号　二〇〇三年　翰林書房

（5）朱牟田夏雄訳・解説『エゴイスト』（下）一九七八年七月　岩波書店

（6）和気律次郎「メレディスと時代との交渉」『帝国文学』十五巻十二号　一九〇九年十二月十日

（7）繁野天來解説・注　"The Egoist : A Comedy In Narrative"（岡倉由三郎・市河三喜主幹）　一九二三年十一月　研究社

（8）『国民新聞』一九〇九年五月二十一日、二十二日

（9）飛ヶ谷美穂子「漱石文庫のメレディス――その基礎事項に関する覚書――」『三田文学』第八号　一九八七年十二月

（10）注（4）に同じ

（11）相原和邦「漱石の表現方法」『鑑賞日本現代文学5　夏目漱石』三好行雄編　一九八四年三月　角川書店（初出：『一冊の講座　夏目漱石』一九八二年二月　有精堂）

（12）正宗白鳥「夏目漱石論」『中央公論』第四十三年第六号　一九二八年六月

【付記】

※『虞美人草』のテキストは『漱石全集』第四巻（一九九四年三月　岩波書店）を使用した。（初出：一九〇七年（明治四十）六月二十三日～十月二十九日「東京朝日新聞」「大阪朝日新聞」）

※『エゴイスト』の英語テキストは"The Egoist", MEREDITH, George, 1905, London: Archibald Constable & Co. Ltd.を使用した。（初出："Sir Willoughby Patterne the Egoist", Glasgow Weekly Herald, 一八七九年六月二十一日～一八八〇年一月十日）

※『エゴイスト』の日本語訳は朱牟田夏雄訳・解説『エゴイスト』（上・下）（一九七八年五・七月　岩波書店）を使用した。

※傍線は私に付した。

（れおん　ゆっと　もい、広島大学大学院博士課程後期在学）